
発掘庭園の保存と活用—朝倉館跡庭園特別鑑賞会のその後—

Preservation and utilization of excavation garden in Ichijodani Asakura Family Site.

藤田 若菜

Fujita Wakana

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

Fukui Prefectural Ichijodani Asakura Family Site Museum

Key Words : 1.発掘庭園 2.遺構保存 3.庭園鑑賞

1.excavation garden 2.preservation of the remains 3. appreciate Japanese gardens

1. はじめに

特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡（以下、本遺跡とする）は、室町時代後期に越前一国を治めた戦国大名、越前朝倉氏の城下町の跡である。城下町跡の構成要素の一つである庭園遺構については、昭和42年（1967）実施の3つの庭園（湯殿跡庭園、諏訪館跡庭園、南陽寺跡庭園）の発掘調査を皮切りに、当主館や当主一族の館、家臣屋敷、医師の屋敷等、他に類例を見ない多様な附属施設の庭園遺構を確認し、調査後には史跡公園としての整備を継続的に進めている。なかでも後世の改変をほぼ受けずに良好な出土状況であった前述の3庭園と、当主館跡にて建築遺構群とともに検出した朝倉館跡庭園は、平成3年（1991）に国の特別名勝の指定を受け、整備手法は、露天下における庭石等の露出展示を基本としている。

史跡整備の開始から半世紀が経過し、庭石を含めた石製遺構等の経年劣化が生じ、また近年は気象災害や獣害による劣化も認められる。そこで本県では「一乗谷朝倉氏遺跡劣化対応事業」を実施し、対応策の検討のための調査・研究を通じて、エポキシ系樹脂を用いた接着手法の決定に至り、また活用面では、北陸新幹線開業に向けた当館の新博物館建設とともに、庭園遺構群の着実な保存と更なる活用手法を模索していく旨を、平成30年度日本庭園学会全国大会の公開シンポジウムにて報告した¹⁾。

本報告では、その後に実施した朝倉館跡庭園における遺構の保存・活用の新たな試みと、昨年10月に開館した当博物館と遺跡の一体的な活用に関する方策を報告する。

2. 朝倉館跡の発掘調査と整備

朝倉館跡（当主館跡）は、朝倉氏の領国統治の中心施設であり、城下町の中心部に位置する。背後の山には山城が築かれ、当主館から沢沿いに直登する登城道の存在も知られている。文献史料からは、朝倉館の役割は政治拠点に留まらず、京都からの下向文化人等の客人をもてなす場でもあったことが知られている。特に、永禄10年（1567）に始まる足利義昭（秋）の御成および元服の儀については、文献史料と検出遺構・遺物の重ね合わせにより、地方における御成等の実像を明らかにした²⁾。具体的には、南庭をもつ「主殿」にて式三献の儀式が執り行われ、続いて中庭を南庭とする「会所」にて十七献の饗宴が続き、四献の後には中庭に仮設された能舞台にて演能が行われたと整理される。また、「小座敷」脇の井戸からは茶の湯や香道具の遺物が出土しており、枯山水様の平庭に面する小座敷は、十献の後の「別座（茶の湯）」の空間と推定され、小座敷の南庭かつ「泉殿」の東庭にあたる園池の鑑賞もあわせて楽しまれたものと想定できる。朝倉館跡は上記の庭園遺構のみならず、土塁や濠、広庭（犬の馬場・柳の馬場）等の外郭部、射庭や南庭等の庭空間、武家空間に欠かせない厩等の建物群、晴の空間の施設群と造庭、藪の空間に当たる台所や蔵等、当主館の遺構が総合的に検出されたことで、戦国大名の政治・文化活動の具体像を窺うことができる。また、特別名勝の指定範囲が朝倉館跡の全体を含む点も特徴として挙げられる³⁾。

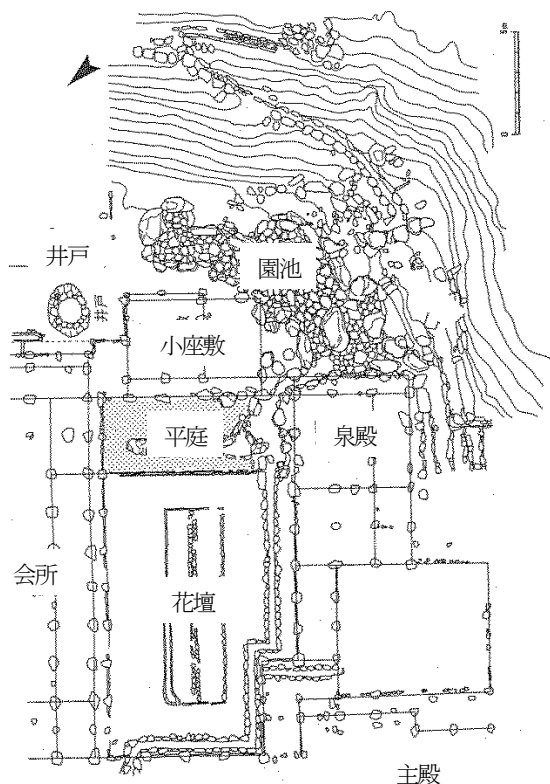


図1 朝倉館跡庭園と建物配置⁴⁾

3. 朝倉館跡庭園の保存・活用上の課題と近年の取組

(1) 保存・活用上の課題

課題はいくつか挙げられるが、中でも露出展示遺構の着実な保存が、最重要かつ最困難な課題である。朝倉館跡の遺構石は、当主館ということで石材の多くが山石の巨石であり、川石と違って弱部が残っているため、剥離などの劣化が起りやすい。さらに、一部は朝倉氏滅亡前後の火災により火を受けているため、石の種類に関係なく劣化が進行しやすい特性をもつ。また、山林部に囲まれているため、イノシシ等の獣害に合いやすく、豚コレラが流行した際にはいったん落ち着いたが、花壇跡や園池の護岸遺構が荒らされるなど、定期的に被害が発生していた。また、朝倉館跡内は露出展示遺構が密集しているために人力による管理に限られ、かつては地元住民が遺構石まわりの草を抜く姿が日常風景であったが、近年は地元住民の高齢化が進み、除草剤が使われるようになってきた。そして朝倉館跡特有の課題として、回遊路が露出展示遺構の保存に配慮しているものの、遺構の残存状況が良好なために、礎石等の一部の石製遺構の上や脇を歩かせる動線となり、来訪者の足が石製遺構に当たったと考えられるき損が発生することもあった。

活用上の課題としては、動線が戦国期の経路とは異なり、さらに地面の高さからの庭園鑑賞に限られていたため、建築と庭園の遺構が一体で確認された、朝倉館跡庭園の特徴を活かしきれていない状況であった。

(2) 保存の取組：劣化対応事業と連携研究事業

平成24年(2011)より、「一乗谷朝倉氏遺跡劣化対応事業」(以下、劣化対応事業とする)を開始し、平成29年(2016)までは朝倉館跡を主な対象として、劣化対応策の検討を実施した。劣化対応事業を通じて、冬季の積雪下にあつては石の表面温度が0°Cでほぼ一定することから、遺跡の平地部では大部分の期間において露出展示が可能であることをまず確認した。また、昭和44年度に石製遺構に施工されたエポキシ系樹脂は、今も健全な状態にあり、その要因は樹脂に混合した石粉が紫外線による劣化を抑制したものと推定した。以上の結果をもとに、昭和44年度施工のエポキシ系樹脂の同等品を使用し、剥離片等の接着を進めている。一方で、破断面が大きい割れなど、接着剤のみでは対応が困難な劣化に対しては、令和元年度から国立文化財機構奈良文化財研究所と福井県の間で連携協定を締結することで関係を強化し、「一乗谷朝倉氏遺跡の保存技術の確立に向けた連携研究事業」(以下、連携事業とする)を開始した。また、連携事業の開始にあわせて、遺跡保存科学を専門とする県職員を採用し当館に配置した。劣化対応事業および連携事業では、保存科学と地質学、土木工学を専門とする有識者に指導を受け、調査・検討を継続している。

(3) 活用の取組：特別鑑賞会の実施

建築と庭園の遺構が一体で確認された特徴を活かすべく、平成27年(2014)、建築遺構の平面表示の上に床(視点場)を設置する「朝倉館跡庭園特別鑑賞会」を、期間を限って実施した。床を設けた結果、平面表示だけでは認識しづらかった、園池に面した二つの建物の存在を直観的に示すことができ、また、園池に臨んだ際には、滝口の水落石と水分石が重ならないなど、戦国期の景色に近い鑑賞が可能となった。そのほか、枯山水様の平庭は、座敷からでは広縁に蹴られて見えず、広縁に出て初めて鑑賞しうることを認識するなど、建築と庭園の関係性により具体的な検討にも役立てられた。一方、床を木製としたために、礎石等の露出展示遺構の一部が視認できないなどの課題を残した。

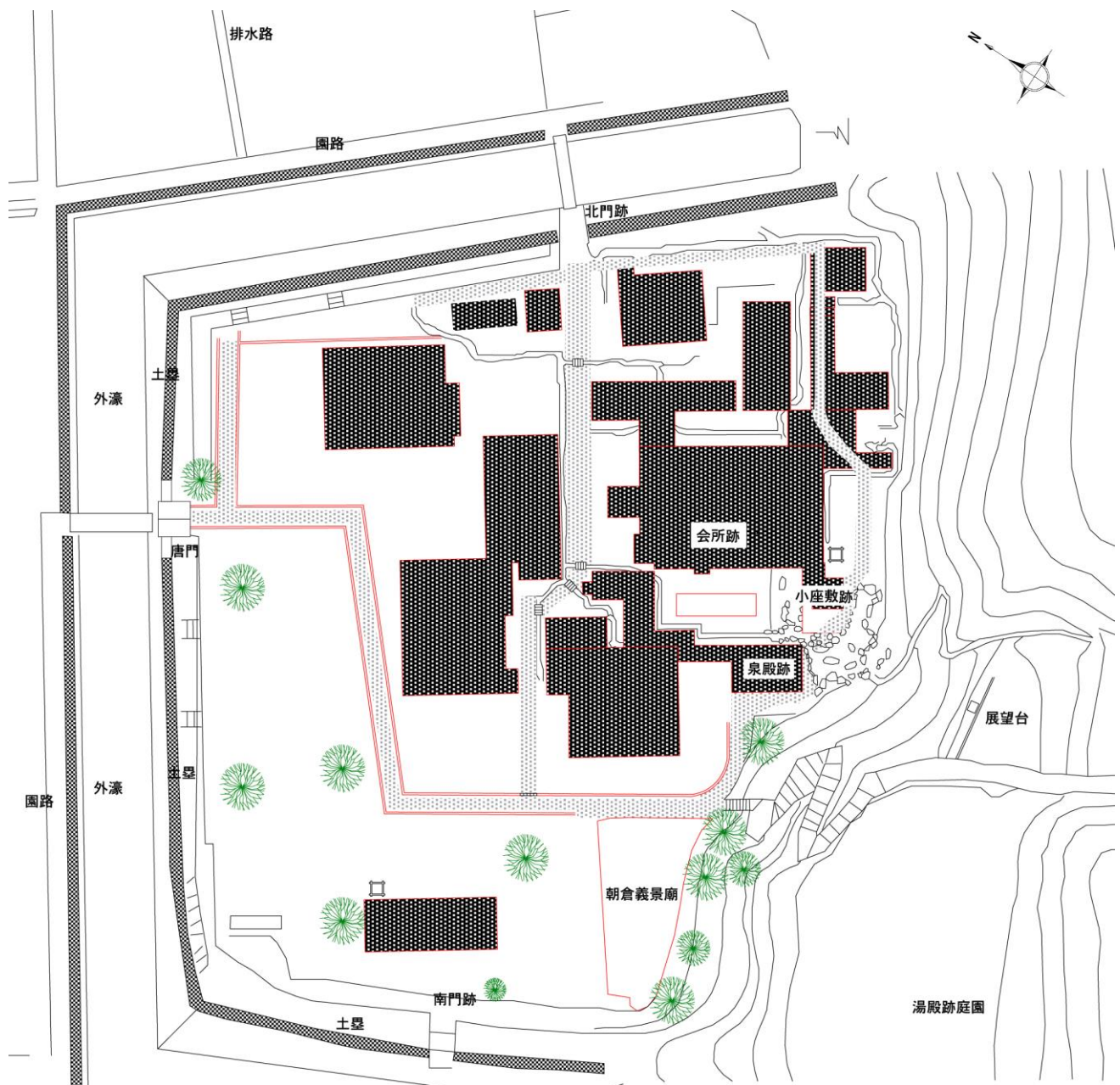


図2 整備前の状況（濃い網掛けが建物跡等の平面表示・薄い網掛けが園路）



写真1・2 遺構の劣化（昭和45年時と平成26年時）



写真3・4 鑑賞風景の違い（左：通常時、右：床設置時）

4. 全国大会報告後の進捗

(1) 計画の立案

全国大会後、当県では北陸新幹線福井・敦賀開業を超越した整備の重要性が高まり、必要な計画策定を順次進めた。遺跡整備に関して挙げれば、まず令和2年に『特別名勝一乗谷朝倉氏庭園保存活用計画』（以下、保存活用計画とする）が、遺跡の管理者である福井市により策定され、本質的価値および構成要素が整理され、さらに課題を受けた今後の方針が明文化された。続いて令和3年には、保存活用計画の内容を受けて、福井県が『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡再整備等計画』を策定し、遺跡全体における各地区の位置づけを明確にした上で遺跡全体に共通する方策、または各地区の独自性を活かした方策を具体化した。朝倉館跡では、劣化対応事業に基づく接着等の保存処置を施しているものの、接着力よりも来訪者の足が当たった際の衝撃の方が勝ることから、着実な保存を実現するために動線を根本的に見直し、さらに建築と庭園の遺構が一体で確認されている、朝倉館跡の特長を活かした再整備を実施する方針とし、特別鑑賞会の発展形として常設の「回遊・鑑賞施設整備」を立案した。

(2) 博物館の開館

翌年の令和4年10月には、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館を開館し、資料館時代の展示テーマを引き継ぎつつも、朝倉館の原寸再現展示等の新たな展示手法を提示した。原寸再現展示は饗宴がおこなわれた空間を対象とし、足利義昭等の客人を迎えた会所や茶の湯をおこなったと推定される小座敷にて、レプリカ展示ではあるが花壇（中庭）や平庭の全容、園池の一部を見学でき、演能



写真5 博物館内の原寸再現展示（中庭の花壇と会所）

や茶の湯といった当主館に相応しい体験をおこなえる空間とした。展示面積の都合から園池は一部の再現に留まるが、本物の遺構がある遺跡現地への誘導を重視したガイドダンス映像等を製作し、また、ソフトの施策としては、原寸再現展示等の博物館展示を遺跡現地と重ねて見学できるVRアプリが製作され、県・市等が一体となって遺跡現地と博物館をつなぐ仕組みを積極的に設けた⁵⁾。

(3) 朝倉館跡回遊・鑑賞施設の整備

計画にあたっては、戦国期の動線と建物跡を活かし、かつ博物館内の原寸再現展示と整合しやすい経路・範囲を基本とした。保存活用計画により、礎石等の露出展示遺構が本質的価値の一つに分類されたことから、見学可能な資材（ガラス製床）を採用した⁶⁾。構造は、庭石や礎石等の露出展示遺構の保護を着実とするため高床とし、遺構面に与える荷重を軽減するため、床下はトラス構造とした。仕上げは遺跡景観に配慮し、床高を低く抑えた亜鉛メッキとした。床高を抑えることは、より多くの来訪者が利用できるスロープ新設も可能とした⁷⁾。そのほか、床下構造を支える金属板は、舗装で隠す方針とした。博物館開館の翌春にあたる令和5年3月に、まず泉殿跡の範囲を完成させた。来年3月の新幹線開業時には、小座敷跡の範囲も完成することから、園池に伴う二つの建物跡からの庭園鑑賞が可能となる。また、ガラス製の施設を整備するとともに、戦国期の通路と推定される経路の園路は、他地区と同様に道路跡表示の舗装に改修し、他の園路もまた他地区と同様に土系舗装に改めることとした。なお、資材は、東北地方で長期の使用実績があり、耐久性の高さに定評があるものを採用した。



写真6 令和4年度施工完了状況（泉殿跡とスロープ）

5. おわりに：現時点の評価と今後の見通し

回遊・鑑賞施設は、令和6年度の回廊部の施工をもって完成の計画であるが、今年度より泉殿跡部分の一般公開を始めた。従来は朝倉館跡の入口である唐門のみを見学する団体客が多かったが、設置後は団体案内に回遊・鑑賞施設が組み込まれ、多くの来訪者が最奥の庭園を見学するようになった。そのほか、スロープ途中にある特別名勝の4庭園を解説する既存説明板が顕在化し、庭園周遊の促進にも繋がっているようである。また、定期的には発生していた花壇跡や護岸石組の獣害は、現時点では発生しておらず、獣害の抑制が期待される。一方、完成前のため説明板は仮設であり、施設の必要性やガラス製床の意味を十分に伝えられていない。今年度より遺跡全体のサイン計画の策定が進んでおり、回遊・鑑賞施設の完成時には、伝わりやすい説明板の設置を実現したい。また、将来的には回遊・鑑賞施設を活用した茶会等のイベントを行い、その際に利用者アンケートを実施するなどして、回遊・鑑賞施設の評価を固めていきたい。

新幹線開業に伴う来訪者急増を想定し、着実な保存策を講じるとともにこの機を捉え、より多くの方に一乗谷の価値を伝えていきたいと考える。また、一乗谷全体の庭園遺構群の整備方針は、平成30年の全国大会でも報告したとおり、朝倉館跡庭園のように復元的整備・活用を積極的に行う一方で、湯殿跡庭園を「兵どもが夢の跡」然とした保存・活用に留めるなど、遺構の残存状況や立地環境などを考慮した差別化が、一乗谷の豊かな周遊環境の造成に有効である、との考えは一貫して変わっておらず、今後とも計画的で積極的な整備を進めていきたい。

註

- 1) 詳細は、日本庭園学会『日本庭園学会誌 No. 33号』、2019、pp. 21-26 を参照
- 2) 吉岡泰英「朝倉館の建築的考察」『朝倉氏遺跡資料館紀要』福井県立朝倉氏遺跡資料館、1983 や、小野正敏『戦国城下町の考古学 一乗谷からのメッセージ』講談社選書メチエ、1997 等に詳しい
- 3) 昭和5年(1930)という早い段階で「史蹟及名勝一乗谷朝倉氏館跡附南陽寺跡」として、朝倉館跡と庭園群の保存が一体的に図られた。この点は、平澤毅『文化的資産としての名勝地』、2010、p. 17 にて「今日における遺跡化した庭園や発掘された庭園遺構の保護の観点からも極めて注目すべき嚆矢」と評価されている。
- 4) 吉岡泰英「一乗谷朝倉氏遺跡の庭園」『庭園学講座 VI日本庭園と石』京都芸術短期大学/京都造形芸術大学 日本庭園研究センター、P. 86 に加筆
- 5) VR アプリ「戦国時空伝」を、活用のため県・市・民間で構成する団体である「一乗谷朝倉氏遺跡活用推進協議会」が博物館開館にあわせて製作・公開した。
- 6) 国内において屋外の文化財を対象として床にガラス材を採用した事例はないが、富山県内の屋外にて15年以上の使用実績がある既製品を採用した。突起があり滑りにくい製品を使用し、当県の工業技術センターの協力を得て「すべり係数」を測定して安全性を確認した。なお、積雪期は使用を中止するが、積雪により動線経路を制限してきた従前の公開範囲と変わらない。
- 7) 床高は戦国期の推定高よりも10 cm程度低くなったが、景観性と利用性を優先した。

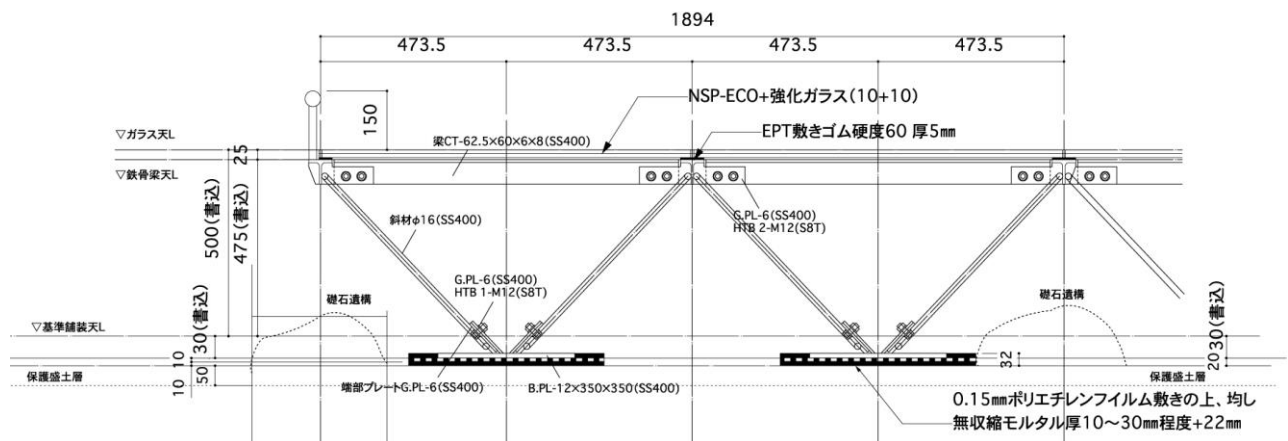


図3 トラス構造の断面図

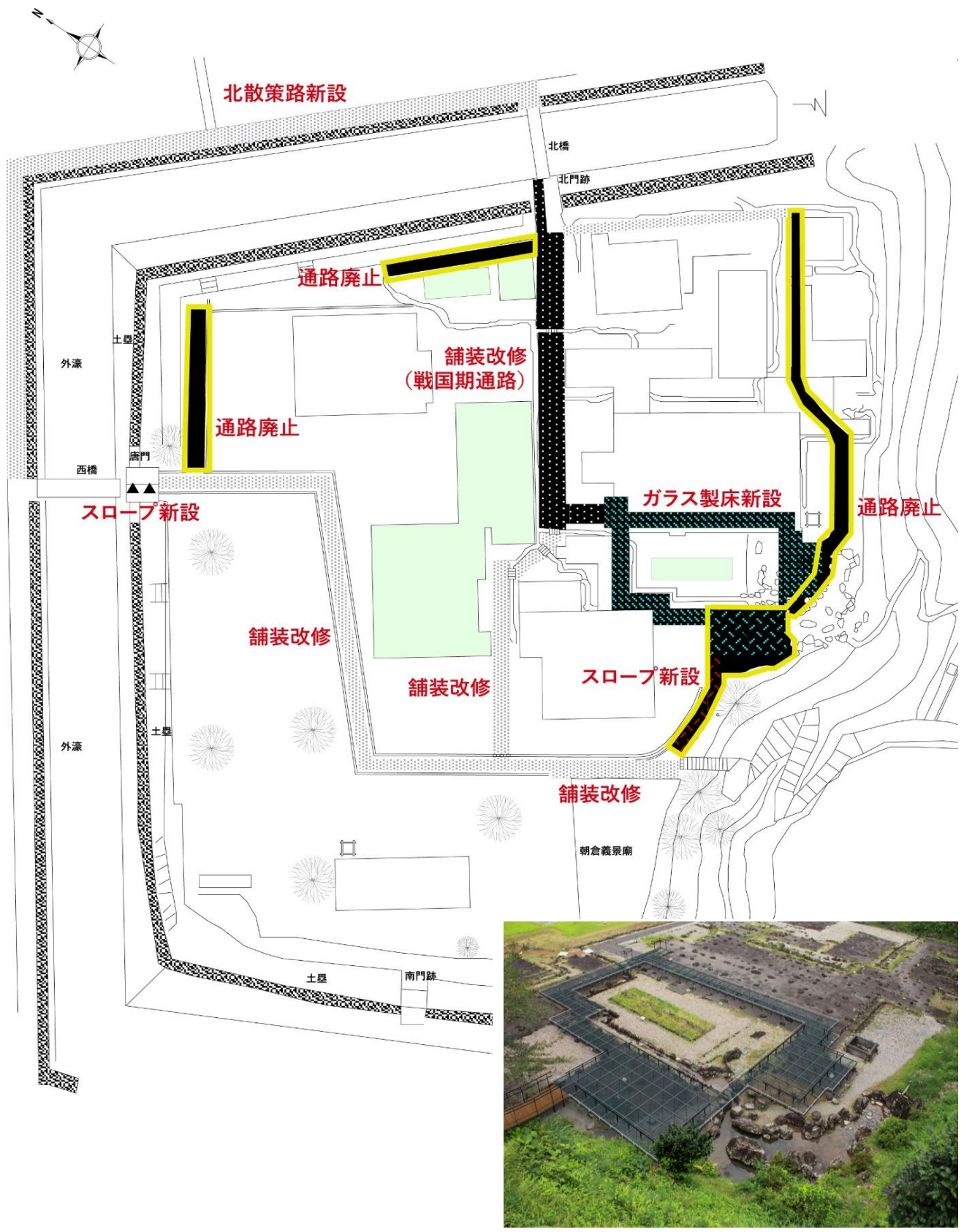


図4 整備計画図（太字が再整備の内容・太枠内が令和4年度工事箇所）・完成イメージCG図